

追悼

筆谷稔先生からいただいた学恩

— そのささやかな回想 —

星

明

およそ人間として良き師に巡り合えることはこよなき幸せである。筆谷稔先生が存在されることによって、どれほど多くの人間がこの幸せを味わうことができたことか。私もこの幸せを味わえ得た一人であった。しかし、昭和五十七年五月十五日午前五時を境にして、もうこの幸せを深めることができなくなってしまう。この悲しみと寂しさは筆舌に尽くしがたい。五一歳の生涯を予知されていたかのように、全速力で突っ走られた先生を思うとき、「先生、一体なぜ、それほどまでに急がれたのですか」と言わずにおれない。しかし、今は心を静め、先生の在りし日のお姿を偲びたい。

筆谷先生は大学院の講義や演習の時間にこんなことを話してくださった。「君らプロになる気やったら、今は寝食を忘れて勉強せなあかん」、「論文には分かり切ったことをだら

だら書くな」、「君らの論文のええとこはここで、あかんとこはここや」、「若い時は若い時なりの論文を書けば良い、一気に良い論文は書けんよ。書かんかったら後退するよ」、「どれほど一般化レヴェルの高い理論でも、社会学である限りエンピリカル・リファレンスがあるよ」と。そして、院生に的確な研究の方向づけをくださった。その先生は、ご研究中の複数のテーマをいつも話された。一見、拡散しているかのようにみえる先生の学問対象の構成は、ビュロクラシーからみた組織社会論が中核であり、そのまわりに政治社会学と理論社会学、外縁に社会学一般と政治学一般とからなっていた。この実証的な学問の円とは別に、先生の間味あふれるエッセーや論文の円があったし、先生の人柄があった。先生のご専門はより広くいえば組織論であり、より狭くいえ

ば官僚制論である。官僚制化した組織のなかでの対人関係に過度の喜怒哀楽の感情は御法度である。そんなことは先生も百もご承知のはずである。しかし、周知のように、先生は喜怒哀楽の情の激しい人であった。これも先生の人間味、若者のような情熱と好奇心の表出であったと思う。

先生はどんなに大学運営に追われようと、それを精一杯のご努力でこなされ、同時にそれに優さるゝとも劣らないエネルギーで不断に研究と教育に打ち込まれた。そんな一時、大好きだった絵唐津を前に身心を休められる。そして、『官僚制社会学原理』の構想を練られ、十数年後の『筆谷稔著作集』を考えられる。まさに、先生は大学に籍を置く研究者の職業倫理を、単に言葉や知識を通してではなく、ご自身の日常の行動を通してわれわれに教えてくださった。

筆谷先生の思い出は尽きません。

先生に最後にお目に掛ったのは、ご退院される三日前の五月九日でした。ご看病に献身されていた奥様は、数日後に控えたご退院のご準備のために自宅に帰られており、先生お一人であった。「度々すまんな。明日か、あさってには退院する積りでいる」と言われた。先生、完全にいいんですか、医者はどう言っているんですかとお尋ねしたかった。先生は、私のその間を察したかのように、「大丈夫や、自分の体のことは自分が一番よく分かる」と言われた。四月十八日にご入院され、五月に入るとすぐに、ベッドの頭のところに

奥様が黒のマジックで手書きされた五月のカレンダーがテープで貼られていた。お見舞のたびに、その手書きのカレンダーを指さしながら、「十三日までで退院したい。それには九日か十日に医者に話をし、退院許可を貰う」、「今までかかっていた医者に通院し、体の様子をみながら」、「十五日には院生OB諸君の関西社会学会の発表のリハーサルを聞いて」、「本式に講義をやるのは十九日の社会学史から」と一気に話された。一日も早く元気になって研究、教育、実務をやりたい、やらねばというお気持ちがひしひしと伝わってくる。「一歳の働き盛りの男が一カ月も病院におれない」と言われる。そんな先生に、ゆっくりご療養くださいと申しあげるのは、残酷のような気がした。ご退院は、先生のご予定通り十二日の朝であった。その日、お昼のお電話で「いろいろ迷惑かけるけど、よろしく頼むわ」と言われたのが、私のお聞きした最後のお言葉になってしまった。

でも先生の果された偉大なご研究、先生にお教えを受けた学部生や大学院生、先生の貢献された佛教大学の発展、という種は、近い将来、確実にそれぞれ芽をふき、大きく育つことでしょう。先生にご教導をいただいた人間、ご親交のあった方々、誰しもがそれを信じて疑いません。先生のご戒名、篤学院博道真念居士

先生、どうか心安らかにお眠りください。

(ほし あきら 社会学部専任講師)